（２）大分の歴史に関わりのある主な人物

①大分君恵尺（生没年不詳）

『古事記』『日本書紀』などに見える古代大分の豪族である。大分君稚臣とともに壬申の乱（672）の際、大海人皇子の側近の舎人として、同皇子が大和で挙兵するにあたり密命を受けて東奔西走した。当時、近江京に残っていた大津皇子と高市皇子を父の大海人皇子に合流させた。大分市三芳の古宮古墳（国指定史跡）に、大分君恵尺が葬られていると考えられている。

②金亀和尚（生没年不詳）

平安前期の僧侶で柞原八幡宮の開基。近江国彦根（現：滋賀県彦根市）で草庵を結んで修行し、その後比叡山に住んだ。『由原八幡宮縁起絵巻』によると、金亀和尚は天長4年（827）宇佐神宮に参拝し、千日こもって修行した時、八幡神があらわれ「豊後国に姿をあらわす」とのお告げがあり、その後、宇佐神宮より八足の八幡神の衣※が大楠にたどり着いた。金亀和尚はこれを朝廷に報告し、右大臣清原夏野は仁明天皇の命により、承和3年（836）に社殿を造営させた。柞原八幡宮は平安末期には「豊後国一宮」となり、賀来荘・阿南荘の荘園として大友氏・府内藩主などの信仰をあつめた。

※八足の八幡神の衣：八本の白い布のこと。

③大友頼泰（１２２２～１３００）

大友氏第3代。はじめは鎌倉・京都に在勤し、豊後へは守護代を派遣して支配していたが、蒙古襲来で豊後に土着。文永11年（1274）博多湾に来襲した蒙古軍と戦った。建治2年（1276）に、幕府の博多湾岸石築地構築の命を受け、香椎前浜に石塁を築いている。この間、鎮西東方奉行として筑前・肥前の警護番役催促、九州在住御家人の軍忠認定や幕府への注進などを命じている。頼泰の豊後土着により九州御家人の統率と大友氏による豊後支配が強化されていった。菩提寺は大分市岡川の常楽寺で、墓は寺の近くに現存する（市指定史跡「大友頼泰の墓」）。

④大友義鑑（１５０２～１５５０）

大友氏第20代。永正12年（1515）に父・義長から分国法である『大友義長条々』を示され、同15年、父の死去に伴い跡を継いだ。永正17年（1520）には、弟・菊法師丸に菊池武包の跡を継がせ、大友一族の肥後入国を実現させ、続いて有力な肥後の武士を排し、大神親照・佐伯惟治を討っている。また、筑前・筑後・豊前の領有をめぐって大内氏と戦った。強力に領国支配を推進したが、嫡男義鎮をさけて側室の子塩市丸に跡を継がせようとしたことから、津久見・田口氏に襲われ（「二階崩れの変」）、天文19年（1550）に義鎮に『大友義長条々』を書き遺わし死去した。

⑤フランシスコ・ザビエル（１５０６～１５５２）

イエズス会士。日本にはじめてキリスト教を伝える。天文18年（1549）に鹿児島に上陸後、山口や京都などを廻り、天文20年（1551）に大友義鎮（よししげ）の招きで豊後（ぶんご）府内へ。2か月足らずの滞在でインドに向けて出港するが、その後の豊後におけるキリスト教布教の足がかりをつくる。この時、義鎮（宗麟）からポルトガル国王宛ての親書と献上品を携えている。天文21年（1552）に中国の広東港外上川島で亡くなった。遺骸は2年後インドのゴアに移す。元和5年（1619）に聖人に列せられる。

⑥大友宗麟（義鎮）（１５３０～１５８７）

大友氏第21代。天文19年（1550）の「二階崩れの変」で、父・義鑑（よしあき）の死により家督を継承、その後、反対派を倒し政権を確立。天文20年（1551）に山口からザビエルを招き、キリスト教の布教を許可し、南蛮貿易を行う。永禄2年（1559）には山口の毛利軍と戦い勝利をおさめた。永禄5年（1562）に剃髪（ていはつ）して「宗麟」※と号した。天正初年頃に義統（よしむね）に跡を継がせ、同6年キリスト教に入信した。天正14年（1586）には島津軍が豊後（ぶんご）に乱入するが、豊臣秀吉の救援により島津軍は撤退。宗麟は秀吉から日向を与えられたがこれを辞退した。その直後、隠居先の津久見で病死した。

※剃髪以前は「義鎮（宗麟）」とし、剃髪以後は「宗麟」と表記する

⑦大友義統（１５５８～１６０５）

大友義統（江戸時代の版画）

大友氏第22代。天正初年頃に父・宗麟（そうりん）より家督を継承した。天正6年（1578）には日向に出兵し島津氏に大敗した。天正14年（1586）には島津軍が豊後（ぶんご）へ侵入、戸次川（へつぎがわ）に出陣し大敗した。豊臣秀吉の救援により島津軍は撤退し、豊後一国のみの安堵となった。文禄元年（1592）、秀吉の命で朝鮮にわたり奮戦するが、平壌の戦いで小西行長を救援せずに撤退し、秀吉の怒りを買い領地を没収された。慶長4年（1599）に許されるが、翌慶長5年（1600）関ヶ原の合戦で西軍につき、石垣原で黒田如水に敗れて、追放先の常陸（ひたち）（現：茨城県）で死去した。

⑧竹中重利（１５６２～１６１５）

竹中重利の墓

府内城主。慶長5年（1600）の関ヶ原合戦において東軍についた重利は、その戦功によって翌年大分郡内に2万石と預かり地1万5000石が与えられ府内城主となる。府内城主になった後、徳川家康の許しを得て、城の増築に取りかかり、慶長7年（1602）には四層の天守をはじめ多くの櫓（やぐら）・塀を有

する堂々たる城郭を築いた。城郭完成後は、城下町の建設をはじめ、40余りの町をつくった。商船出入のための港（京泊）を開き、城下を結びつけるための道路を切り開くなど、のちの府内城下町の繁栄の基礎を形づくった。

⑨日根野吉明（１５８７～１６５６）

府内藩主。寛永11年（1634）に竹中氏の後の豊後国府内2万石の城主となる。府内での領国経営は社寺の造営や治水工事に功績をあげた。慶安3年（1650）に開かれた「初瀬井路」は、現在の楢木ダム（現：大分県由布市）から大分市東院を結ぶ最も規模の大きな井路であった。また、城下町の発展にも力をつくし、寛永13年（1636）には由原八幡宮の「浜の市」を再興した。明暦2年（1656）に70歳で病没、大分市円寿寺に吉明の霊廟がある。

円寿寺「日根野吉明公廟」

⑩松平忠直（一伯）（１５９５～１６５０）

徳川家康の二男、結城秀康の長子。父の死去により越前北ノ庄（現：福井県）67万石の城主となる。慶長20年（1615）の大坂夏の陣では、真田幸村をはじめ3，750人の首をとり、真っ先に大坂城へ攻め入るなどの功績をあげた。しかし報償に不満をいだき酒色にふけり、参勤交代を怠ったため、元和9年（1623）、豊後国萩原村（現：大分市萩原）へ追放された。その後、津守村（現：大分市津守）へ移され、幕府は監視のために監検使（府内目付）を派遣し、忠直の死去まで続いた。遺骸は浄土寺で火葬され、遺骨は浄土寺・津守・高野山金剛峯寺に葬られた。

⑪松平忠昭（１６１７～１６９３）

府内藩主。大給松平氏で成重の二男。寛永10年（1633）に父の死により丹波国亀山（現：京都府亀岡市）城主となるが、翌年に豊後国大分郡・直入郡・玖珠郡・速見郡のうち2万2，200石を与えられ、速見郡亀川（現：別府市）に移る。寛永12年（1635）に大分郡中津留（現：大分市中津留）、さらに寛永19年（1642）に大分郡高松（現：大分市高松）に移り、日根野吉明の死後、万治元年（1658）に府内藩主となる。元禄6年（1693）に死去し、府内の浄安寺に葬られた。

⑫脇蘭室（１７６４～１８１４）

速見郡小浦（現：大分県日出町）の庄屋の分家に生まれる。天明4年（1784）、21歳で熊本へ留学し、藩校教授の薮弧山に学び、翌年、

安岐（現：大分県国東市）の三浦梅園に「条理学」を学んでいる。その後、大坂で中井竹山に学んだ後、帰郷して小浦で私塾を開き、寛政3年（1791）には帆足万里が入門している。寛政10年（1798）、熊本藩に招かれ藩校時習館の教授となるが、保守派の反発があり辞任、同藩の領地である鶴崎（現：大分県鶴崎）で子弟の教育にあたった。

⑬廣瀬久兵衛（１７９０～１８７１）

日田（現：大分県日田市）の豪商・廣瀬家の当主。文化7年（1810）に兄・淡窓に代わって家業を継ぎ、西国筋郡代の掛屋※や諸藩の御用達なども勤めた。また、西国筋郡代の塩谷大四郎に協力し公共土木事業に協力し、井路の開発、周防灘沿岸の新田開発を行った。九州諸藩の藩政改革にも取り組み、特に府内藩では家老・岡本主米と青筵の藩営専売制・櫨の栽培・原野開墾などで藩財政再建に尽力している。

※掛屋：江戸時代、幕府・諸藩の公金出納を扱った商人のこと。

⑭毛利空桑（１７９７～１８８４）

儒学者。勤皇家。熊本藩医毛利太玄の二男。空桑は号である。日出の脇蘭室や帆足万里に学び、文政2年（1819）熊本へ行き大城霞坪に師事、さらに福岡へ出て亀井昭陽の門に入る。2年後に鶴崎に帰り、私塾「知来館」を開き子弟の教育にあたった。その後、熊本藩御茶屋内にあった郷校「成美館」、兵学教授所「有終館」などの設立に尽くした。明治4年（1871）に長州の脱走兵をかくまったため入獄した。明治14年（1881）には「天壌社」を結成して反自由民権を唱え、大分の「明倫社」の会長も勤めた。

⑮帆足杏雨（１８１０～１８８４）

南画家。臼杵領市組庄屋帆足家に生まれる。文政7年（1824）、田能村竹田に入門。同年冬には廣瀬淡窓の私塾、「咸宜園」に入門、同11年（1828）に大坂へ行き頼山陽などの文人と交流した。また、田能村竹田に同行してその画法を学び、長崎、日田を旅して中国の文人画家である黄公望の画法を深めた。以後は故郷で過し、自己の画法を完成させ安政期以降（1854～）は王石谷や呉鎮などの中国風の画法を形成した。明治6年（1873）にオーストリアの萬国博に山水図を出品している。

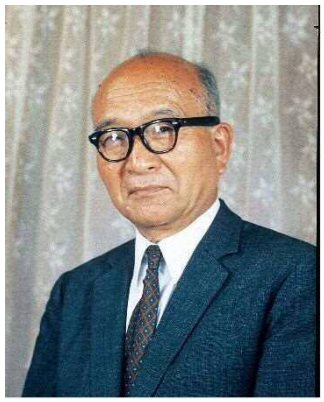
⑯滝廉太郎（１８７９～１９０３）

西洋音楽を取り入れた近代日本音楽の草分け。滝家は代々日出藩士（現：大分県日出町）で、明治政府の官吏となった父の勤務により横浜・富山・大分と転居、のち直入郡長となった父について竹田（現：大分県竹田市）に来て直入郡高等小学校2年に転入。明治27年（1894）に卒業すると東京音楽学校に進学し、同校予科・本科・研究科へと進み、積極的に作曲活動を行った。また、文部省の中学唱歌に「荒城の月」「箱根八里」などが採用され、幼稚園唱歌も仲間とともに発行した。明治34年（1901）からドイツに留学したが病気で帰国、翌年大分で死去した。

⑰福田平八郎（１８９２～１９７４）

日本画家。大分市王子中町生まれ。大分中学校に入るが首藤雨郊のすすめで京都市立絵画専門学校別科に入学。卒業制作展では「雨後」が同校買い上げとなる。大正8年（1919）の第一回帝展で「雪」が初入賞。第三回帝展では「鯉」が特選となる。昭和5年（1930）には洋画研究団体・六潮会を結成、昭和7年（1932）の第十三回帝展に「漣」を出品し、美術界で高く評価された。戦後は日展の常任理事などを務め、昭和36年（1961）に文化勲章を受章、同年に大分市からは名誉市民の第一号を贈られている。

⑱上田保（１８９４～１９８０）



大分市長。大分市畑中に生まれ。大分大学を中退し、上京して弁護士試験に合格し東京で20年間弁護士生活を送る。昭和22年（1947）から16年間大分市長を務め、空襲で焦土と化した町の復興に尽くした。さらに、高崎山のサル寄せにも成功し市の観光資源としている。昭和38年（1963）に名誉市民となり、市長引退後はかねてから計画していた大分生態水族館「マリーンパレス」を完成させた。

⑲高山辰雄（１９１２～２００７）

日本画家。大分市勢家生まれ。大分中学に入り、図画教師・山下鉄之輔に学び画家になることを決心する。昭和6年（1931）に東京美術学校に入学し、在校中の昭和9年（1934）に「湯泉」が帝展に初入選。卒業後は瑠爽社・一采社などに参加する。戦後、昭和21年（1946）に「浴室」が日展特選。昭和24年（1949）には「少女」が再び特選となり、その後も多くの作品を発表した。日本画家には珍しく、リトグラフやエッチングにもユニークな作品を発表しており、昭和54年（1979）には文化功労者に選ばれている。

４.文化財等の分布状況

大分市には、平成31年（2019）1月1日現在、指定文化財として国指定が22件、県指定が75件、市指定が80件の計177件、国の登録有形文化財が35件あり、指定・登録された文化財の合計は212件である。このほかに記録作成などの措置を講ずべき無形の民俗文化財（いわゆる「記録選択」）が4件あるが、市指定無形民俗文化財鶴崎踊（つるさき）が国及び県の記録選択ともなっており、単独での記録選択は県・市によるものが各1件、計2件である。

指定文化財等の件数（平成３１年（２０１９）１月１日現在）

指定文化財

区分	有形文化財							無形文化財	民俗文化財		記念物		合計
種類	建造物	絵画	彫刻	工芸品	古文書	考古	歴史資料	工芸技術	民俗文化財 有形の	民俗文化財 無形の	遺跡	動物・植物・地質鉱物	
国指定	2	1	3	4	1						9	2	22
県指定	7	8	16	11	6	11	2				12	2	75
市指定	21	1	8	5	4	7	12	1	3	6	8	4	80
指定文化財合計	30	10	27	20	11	18	14	1	3	6	29	8	177

登録文化財

有形文化財							民俗文化財	記念物			合計
建造物	絵画	彫刻	工芸品	古文書	考古	歴史資料	民俗文化財 有形の	遺跡	名勝地	動物・植物・地質鉱物	
35											35

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

国	(1)	鶴崎踊	備考　県選択・市指定と重複する
県	1	賀来神社卯酉の神事・鶴崎踊	
市	1	羽田神楽	
記録選択合計	3	※　()は同一の市指定民俗文化財が記録選択もされていることを示す。	

（１）国指定文化財

本市には、国指定文化財が22件、そのうち記念物は、遺跡9件、動物・植物・地質鉱物2件、有形文化財は、建造物2件、絵画1件、彫刻3件、工芸品4件、古文書1件である。ここでは、本市の主な文化財を紹介する。なお、巻末に文化財一覧を添付する。

①柞原八幡宮（ゆすはらはちまんぐう）【重要文化財】（建造物）

大分市北西部の八幡地区にある。平安時代初期の創建とされ、中世には豊後国一宮（ぶんごのくにいちのみや）となり、豊後国守護大友氏や歴代府内藩主の庇護を受けて栄えた。現在残る建物群は寛延2年（1749）の大火で社殿が焼失した後に再建されたものである。

本殿は全国的にも数少ない八幡造（はちまんづくり）で、江戸時代まで33年ごとに造替が行われており、現在のものは嘉永3年（1850）の建築である。社殿を構成する建物群は、寛延

柞原八幡宮中心部

の大火以降、明治初年までの間に府内藩を中心に社寺建築を手がけた大工によって建築されたもので、伝統的な建築技法で建てられた建物がまとまった形で残されており、きわめて貴重である。

②後藤家住宅【重要文化財】（建造物）

大分市と豊後大野市との境界近くに位置し、大分市最古の民家であり、建築年代は18世紀後半とみられている。後藤家はもと岡藩の小庄屋を務めたと伝えられ、現存する建物は、本家の母屋として使われてきた。茅葺寄棟造平入で北から「土間」、「板の間」(10畳大)、「ひろま」、「ざしき」と南北にならび「ひろま」の背後（東側）には「ないしょ」と呼ばれる小部屋が2室並び「ざしき」の背後に「なんど」がある。西側前面以外は1間ごとに柱が立つ土壁となっている。

後藤家住宅

※部屋の名称は『国指定重要文化財後藤家住宅保存修理報告書』による。

③帆足家伝来田能村竹田関係資料

【重要文化財】（絵画）

帆足本家は大分市南部の戸次地区に所在し、近世から近代にかけて大庄屋としてまた酒造業を営んで栄えた。とりわけ、江戸時代後期には、田能村竹田を後援し、多くの文人と交流を深め、帆足家からも帆足杏雨が竹田の弟子となってその画風を継承するなど豊後南画の隆盛に大きく貢献した。資料は帆足本家旧蔵の絵画・書跡26点からなり、現在は大分市美術館が所蔵している。

帆足家伝来田能村竹田関係資料

④木造普賢延命菩薩坐像【重要文化財】（彫刻）

かつては柞原八幡宮境内の普賢堂に安置されていた仏像で、明治初年の神仏分離令に伴って八幡地区にある大山寺に移されたと考えられ、近世までの柞原八幡宮における神仏習合の歴史を示す資料でもある。

平安時代中期の10世紀頃の作とみられ、白象群の上に二十臂の菩薩が鎮座する造形の普賢延命菩薩坐像として現存する最古の作例であり、貴重である。

木造普賢延命菩薩坐像

⑤木造大日如来坐像【重要文化財】（彫刻）

金剛宝戒寺の「大日堂」に安置されている檜材寄木造の高さ約3mの巨大な仏像である。鎌倉時代後期の文保2年（1318）作と見られ、像の作者は鎌倉時代末期から南北朝時代を代表する南都仏師康俊である。力強く均衡のとれた体つきで堂々とした姿をしている。

木造大日如来坐像

⑥横尾貝塚【史跡】

横尾貝塚は、縄文時代早期後葉に縄文海進を契機として集落が形成され、後期前葉まで4期にわたる変遷がみられる複合遺跡である。貝塚をはじめ、土壙墓や貯蔵穴、住居跡などが発見されており、津波などの災害を含む各時期の環境や生態系の変化に対応し人間が生活を営んだ拠点的集落として、また姫島産黒曜石の石器石材の流通拠点としても重要な遺跡である。

横尾貝塚全景

⑦亀塚古墳【史跡】

5世紀初めに築造された全長約116mの大分県内最大級の前方後円墳で、隣接する小亀塚古墳を含めて史跡公園として整備されている。墳丘は3段築成で、全面に葺石が葺かれるとともに円筒埴輪がならべられ、大和王権とのつながりを示す。一方主体部は地元産の緑泥片岩を用いた大型の箱式石棺で、船型の埴輪や船を線刻した埴輪が出土しているなど、海部地方の地域性も強くうかがえる。

亀塚古墳

⑧千代丸古墳【史跡】

大分川支流の賀来川河岸段丘上に位置する円墳で、線刻の施された横穴式石室を有する大分平野唯一の装飾古墳である。墳丘は、現状直径約11m、高さ4．5mであるが、元来は径15m以上の円墳であったと考えられている。横穴式石室で、玄室の奥の棚状に突き出した石に、三角形や四角形、人物などが描かれている。7世紀初頭に造られた、大分君一族の墳墓と思われる。

千代丸古墳

⑨築山古墳【史跡】

5世紀初めに造られたと推定される全長約90mの前方後円墳で、昭和7年（1932）に2基の石棺が発見された。現在、石棺は埋め戻され、それらの上には木造瓦葺の覆屋がそれぞれ建てられている。

築山古墳

⑩豊後国分寺跡【史跡】

大分川左岸の台地上に位置している。江戸中期に建てられた薬師堂（金堂跡）・観音堂（塔跡）・鐘楼堂などの建物がある。8世紀当時の遺構は昭和49年（1974）以来の発掘調査などにより、全国的に見ても屈指の規模を持つ東西182m南北270mに及ぶ広大な寺域や主要伽藍の規模が明らかになった。塔跡は巨大な心礎、礎石9個がほぼ原位置を保っており、その規模などから最高67.3mの七重塔と推測されている。現在、史跡公園として整備されている。

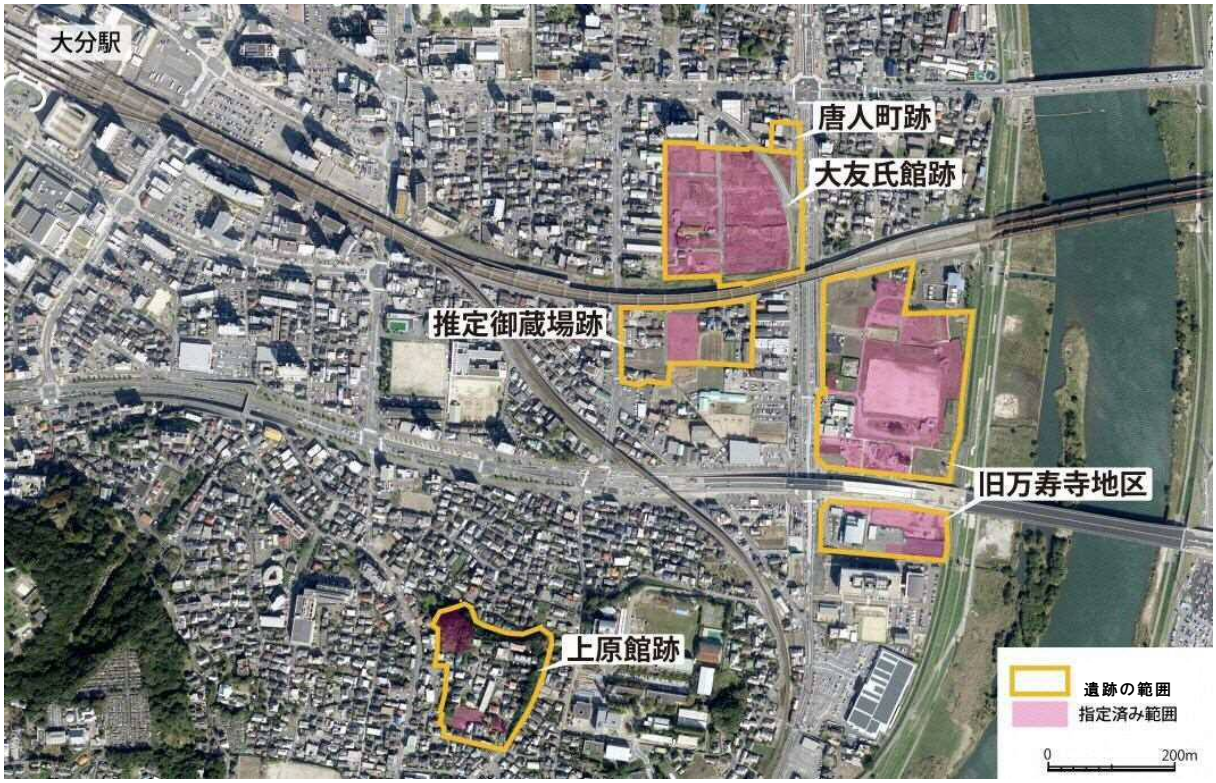
豊後国分寺跡

豊後国分寺七重塔復元模型

⑪大友氏遺跡【史跡】

鎌倉時代以降400年間にわたり豊後及び北部九州を支配した大友氏の館をはじめ、大規模な禅宗寺院である旧万寿寺地区、土塁や空堀により防御性を高めた居館である上原館跡、大友氏館に隣接する唐人町跡及び推定御蔵場跡からなる。このうち大友氏館跡は戦国大名居館としては最大級の約2町四方の規模で、大規模な庭園を有するものである。

大友氏館跡庭園遺構



大友氏遺跡指定範囲図

⑫大分元町石仏【史跡】

豊後国の国府があったと推定される上野台地の東面に築造された磨崖仏で、11世紀後半～末頃の造立とみられる。東向きに10体以上の磨崖仏が彫られていたと考えられるが、現在最も良好に残っている薬師如来坐像は高さ約3mで、平等院鳳凰堂阿弥陀如来像を代表とする定朝様式の伝統をよく踏襲した姿に仕上げられている。磨崖仏でありながら、きめ細かな表面仕上げが行われ、木彫仏に通じる技法が用いられるなど、美術工芸的な高い価値をもっている。

大分元町石仏（薬師如来坐像）

⑬高瀬石仏【史跡】

大分川支流の七瀬川右岸にある丘陵に高さ1.8m、幅4.5m、奥行1.5mの石窟を掘り、中央に大日如来坐像、向かって右側には、如意輪観音坐像、次いで馬頭観音坐像と並び、左には大威徳明王像、深沙大将立像が彫られている。深沙大将は全国的にも珍しく、平安末期頃までの作とみられている。

高瀬石仏

（２）国の登録有形文化財

歴史的風致に関連するものを紹介する。

⑭大分銀行赤レンガ館（旧二十三銀行本店・旧府内会館）【登録有形文化財】

辰野金吾、片岡安の設計で明治43年（1910）着工、大正2年(1913)に完成した。赤レンガの小口積み壁と帯状に配された花崗岩の白線がコントラストをなし、ランタンをもった八角形ドームの屋根は「辰野式ルネサンス」の特徴といわれる。昭和20年（1945）の戦災で内部は焼失したが、外壁を保存する形で修復され、平成5年（1993）に再度内部が改修された。

大分銀行赤レンガ館

⑮帆足家本家住宅「富春館」【登録有形文化財】

帆足本家は臼杵藩の在町であった大分市南部の戸次にあり、近世には大庄屋を務めた。主屋は棟札より慶応元年(1865)に建築され、「富春館」と称された。木造二階一部平屋建、入母屋造、桟瓦葺で、南側中央に式台玄関を設け、西側に一段高い座敷、北側に仏間、東側に居室を配する。床の間の造りなど本家主屋として意匠、材料、技術共に秀でる。主屋の他、宝蔵、中門、塀など江戸末期から昭和初期の建造物7件が登録有形文化財となっている。

帆足家本家住宅「富春館」（主屋）

⑯帆足家分家住宅「松石不老館」【登録有形文化財】

主屋は棟札より明治39年（1908）に建築され、「松石不老館」と称された。敷地東側の通りに面して建ち、通り土間をもつ商家建築の形式で、北側に座敷や次の間を配して接客空間とする。接客部分の各部屋の意匠は優れ、近代

帆足家分家住宅「松石不老館」（主屋）

の大工技術の高さがうかがえる。主屋の他、新座敷、質蔵、塀など明治中期に建てられた建造物10件も登録有形文化財となっている。

⑰植木家住宅【登録有形文化財】

植木家は王子中町にあり、江戸時代から明治にかけて鋳物を営んだといわれる商家で、主屋は安政元年(1854)建築、通りに北面して建つ町家である。

入母屋造桟瓦葺二階建で、1階に出格子を構え、彫刻入りの大きな「持送り※」を付けて、下屋を持ち出し、下屋両袖は漆喰で塗り込めるという特徴的な構えで、市内では数少ない近世商家建築である。主屋の他、離れ、離れ控えの間も登録文化財となっている。

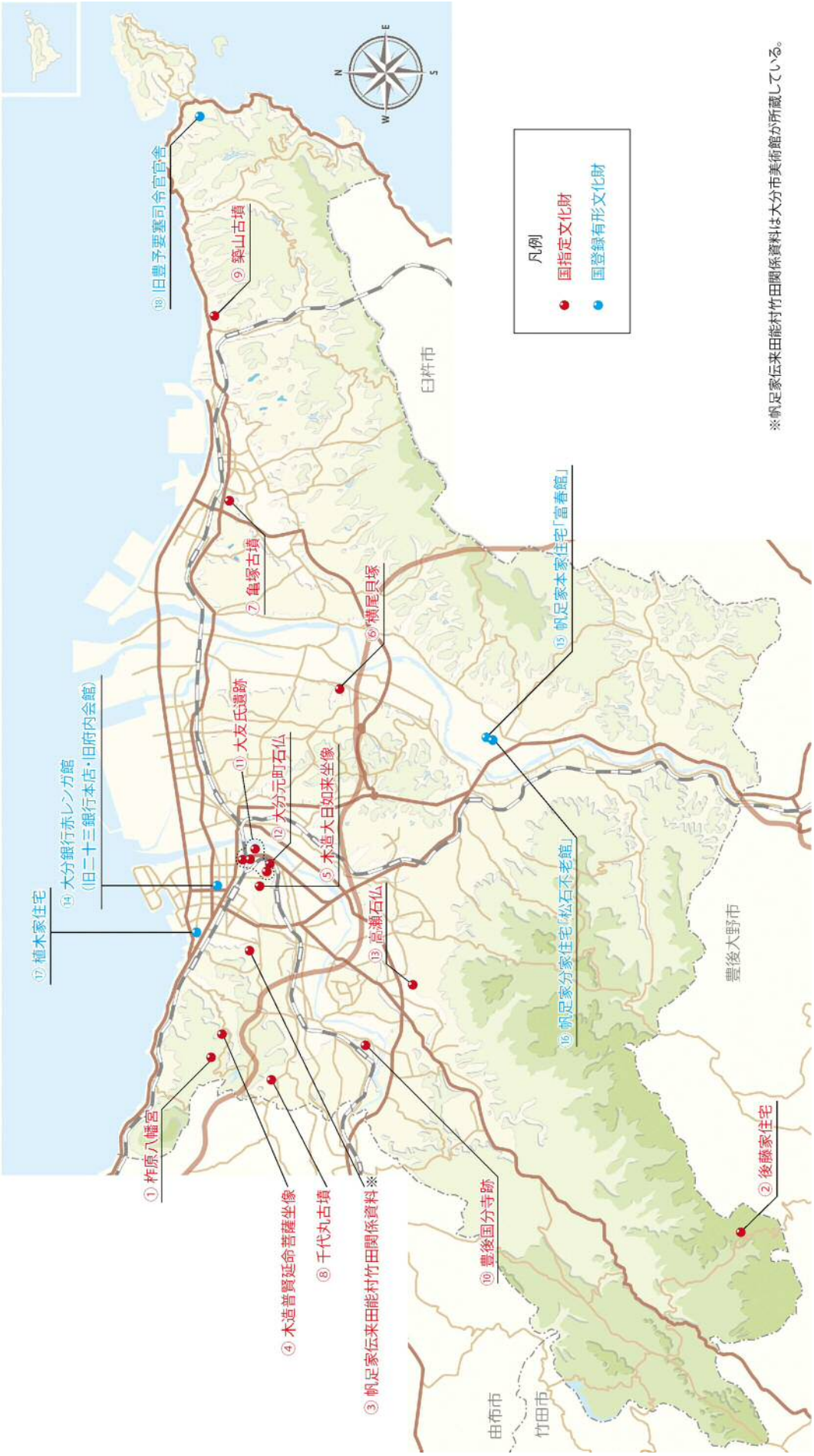
※持送り:壁から水平に突き出て、梁などを支える三角形状の補強材のこと。

植木家住宅（主屋）

⑱旧豊予要塞司令官官舎【登録有形文化財】

大正15年(1926)に発足した豊予要塞の司令官官舎で、大正14年(1925)～15年(1926)頃に建設されたと推定される。洋風の玄関と暖炉のある応接間などからなる公的な場と、和室のみからなる私的な場とで構成される和洋折衷の建物である。

旧豊予要塞司令官官舎



国指定等の文化財位置図

（３）県指定文化財

県指定文化財は75件で有形文化財61件、記念物14件である。有形文化財のうち建造物7件、絵画資料8件、彫刻資料16件、工芸品11件、古文書6件、考古資料11件、歴史資料2件である。また、記念物は遺跡12件、動物、植物2件である。

教尊寺本堂

①教尊寺（７棟）

大分市東部、本神崎にある浄土真宗の寺院で、寛永18年（1641）に熊本藩主の支援を受けて建立された。教尊寺は参勤交代の際に熊本藩主の休憩所としても利用され、幕末には書院の改築と御殿の増築が行われ、これらも現存する。江戸時代の建物配置がほぼそのまま現存し、18世紀～19世紀にかけて建てられた建造物7棟が県の有形文化財となっている。

早吸日女神社本殿

②早吸日女神社本殿・総門

神武天皇東征伝説にゆかりをもつ、佐賀関に所在する古社で中世～近世には「関権現」として知られ、元禄10年（1697）熊本藩主により建てられた総門、宝暦13年（1763）に再建された本殿が県の有形文化財となっている。拝殿、神楽殿、石鳥居は市指定有形文化財である。また早吸日女神社社家の小野家住宅は18世紀後半の建築とみられ、類例の少ない社家建築として貴重である。

早吸日女神社総門

③万年橋

西寒多神社の神橋として神社前の寒田川にかけられた全長22m、幅3m、高さ4.8mの石造単アーチ橋である。文久2年（1862）に地元庄屋佐藤孝兵衛らが発起人となり、大野郡柴北（現：大分県豊後大野市）の石工後藤郷兵衛らにより建造された。建造の経緯は橋の横にある石碑に記録されており、貴重な歴史資料となっている。

万年橋

④木造聖徳太子立像

金剛宝戒寺に伝わり、写実的な作風は鎌倉時代後期の運慶の流れをく

木造聖徳太子立像

む慶派仏師によるものとみられる。金剛宝戒寺が徳治2年（1307）に大友貞宗により律宗寺院として再興された際に造立されたものと考えられ、律宗を通じた奈良西大寺との関係や仏師作品の広がりを考える上で貴重な資料である。

⑤山水蒔絵縁起絵巻 納 箱

山水蒔絵縁起絵巻納箱

県の有形文化財である紙本著色由原八幡宮縁起絵巻の納箱で、梨子地の蓋に「由原八幡宮御縁起」の金泥で題銘があり、蓋裏の銘で元和8年(1622)に岡藩2代藩主中川秀征（久盛）によって新調寄進されたことがわかる。箱の蓋と側面には、金蒔絵で山水画が描かれている。江戸時代初期の年号が記された漆工芸として貴重である。

⑥王ノ瀬石棺

王ノ瀬石棺

市内東部の王ノ瀬天満社境内にある小堂に安置されて伝世されていた家形石棺である。凝灰岩をくりぬいて造られており、縄を掛けるための突起があるなど家形石棺としては古い形態である。付近にあった5世紀後半の前方後円墳辻1号墳の後円部の位置に明治時代初期まで所在した「石舩神社」の神殿内にあったものが、その後に王ノ瀬天満社境内に移された可能性が高いと考えられている。

⑦府内城 跡

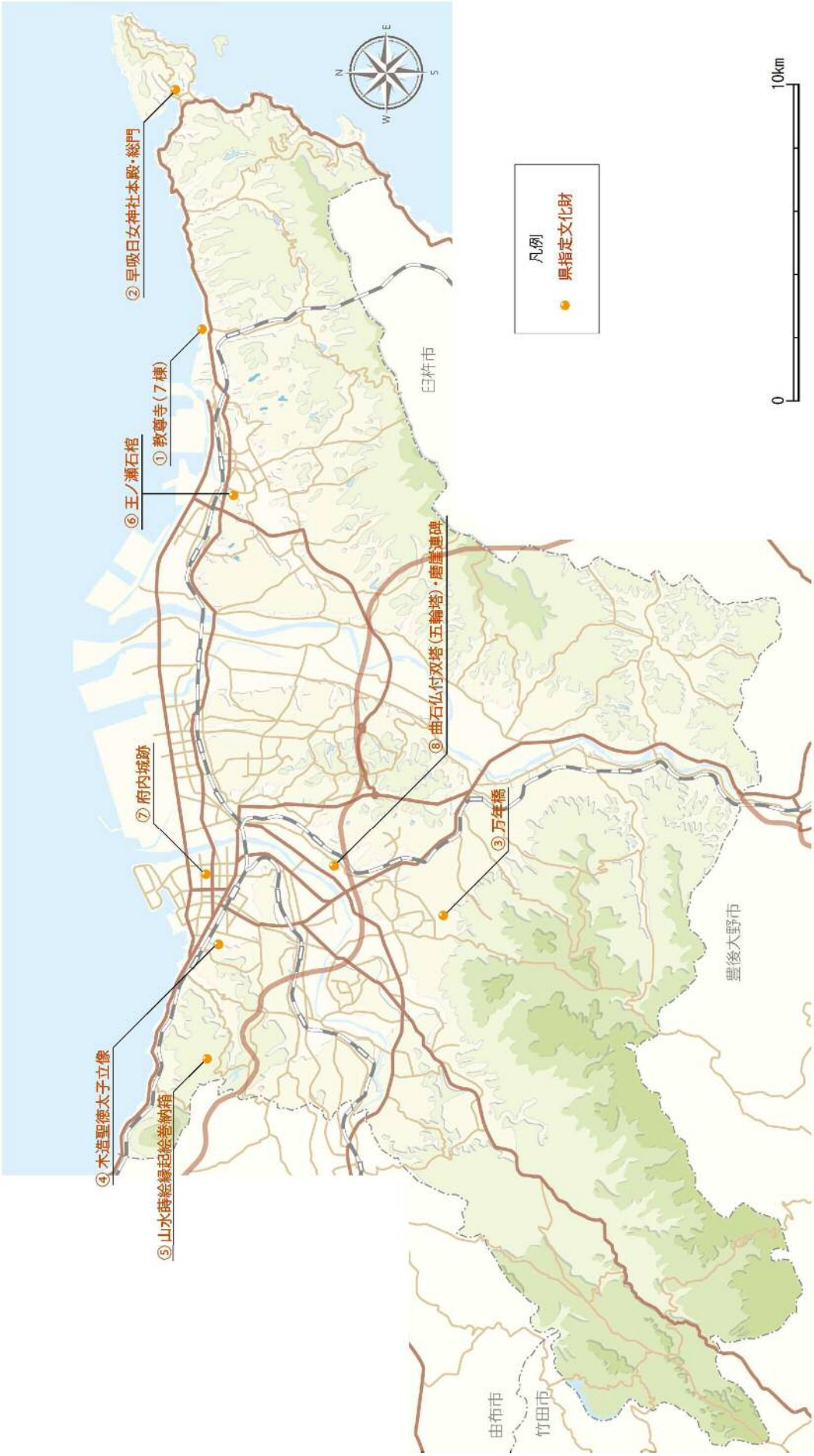
府内城跡（人質櫓）

慶長2年（1597）に福原直高により築城がはじめられ竹中重利により慶長7年（1602）に完成された城で、4重の堀で囲まれた平城である。堀、石垣、塀、天守台をはじめとする櫓台及び現存する櫓2棟（人質櫓、宗門櫓）が県指定史跡となっている。それ以外の曲輪内の平面、帯曲輪、山里（松栄神社）は市指定史跡となっている。

⑧曲 石仏 付 双塔（五輪塔）・磨崖連碑

曲石仏

森岡丘陵の中腹南面2ヶ所の石窟に彫られている。最大の石窟には像高約3mの丸彫の伝釈迦如来像が安置され、入口には持国天、多聞天が彫られており、もう一方の石窟には三尊像が彫られている。平安時代末期から室町時代に造立されたものと考えられる。伝釈迦如来像は寄木造の手法をとっており、石仏では例のないものである。


② 早吸日女神社本殿・総門
① 教尊寺（7棟）
⑥ 王ノ瀬石棺
⑦ 府内城跡
⑧ 曲石仏付双塔（五輪塔）・唐崖連碑
③ 万年橋
④ 木造聖徳太子立像
⑤ 山水蒔絵縁起絵巻納箱
臼杵市
豊後大野市
由布市
竹田市
凡例
県指定文化財
0
10km
N
E
S
W

県指定の文化財位置図

（４）市指定文化財

市指定文化財は80件で有形文化財58件、有形の民俗文化財3件、無形文化財1件、無形の民俗文化財6件、記念物は、遺跡が8件、動物・植物が4件である。有形文化財のうち建造物は21件、絵画1件、彫刻8件、工芸品5件、古文書は4件、考古資料は7件、歴史資料は12件である。

①西寒多神社神庫

西寒多神社は、『延喜式』にも記録されている古社で、中世には大友氏より信仰され、応永15年(1408)大友親世のとき現在地に移したとされる。「神庫」は神社の神宝を納める建物であり、算盤木で15段井桁に組み重ねた校倉造、明治19年（1886）改築されたものである。県内にある校倉造の神庫としては宇佐神宮の「板倉」があるのみで類例が少なく貴重である。

西寒多神社神庫

② 霊山寺山門

霊山寺は、市内南部にある霊山の山腹に所在する天台宗寺院である。山門は江戸時代初期に豊後に配流された松平忠直が寄進して寛永15年（1638）に建てられたもので、「禅宗様」の特徴がみられ、全体に彩色が施され、柱間を飾る彫り物や欄間に意匠が凝らされている。

霊山寺山門

③鳥居（王子神社）

鳥居の銘文より寛政８年（１７９６）府内藩主松平近儔によって寄進された鉄製鳥居。王子神社周辺は駄原といい江戸時代から明治時代にかけて鋳物師が多く「駄原鋳物師」と呼ばれていた。鳥居は駄原鋳物師の技術を伝えることから大分市の有形文化財に指定されている。

鳥居（王子神社）

④木造五劫思惟阿弥陀如来坐像

阿弥陀如来が長い時間修行を行ったことによって頭髪が頭全体を覆うほどに伸びたことを表現した仏像で、１５世紀の作と考えられ、同時期のものとして類例の少ない貴重な仏像である。

木造五劫思惟阿弥陀如来坐像

⑤立小野区有文書

市内南部の立小野区で歴代区長が保管し伝来したもので、貞享2年（1685）から昭和2年（1927）までの山林・入会林野の利用に関するものを中心とする。文書の中には農民48名による「傘連判状」が含まれ、現存する同種の文書としては県下唯一のものである。

立小野区有文書（傘連判状）

⑥御城下絵図

大給松平氏が府内を治めていた17世紀後半～18世紀前半に描かれた絵図で、府内藩主が柞原八幡宮祭礼（浜の市）を見物に行く場面を沿道の様子を含めて描いたものである。数少ない府内城の様子を描いたものとして貴重であることに加え、城下から浜の市にかけての豊前道沿いにおける当時の風俗、景観や浜の市祭礼の状況を知る上でも貴重な資料である。

『御城下絵図』

⑦岡藩船三佐入港船絵馬

岡藩領であった三佐の野坂神社に文化10年（1813）に奉納されたもので、岡藩船が参勤を終えて三佐港に帰港している場面を描いたものである。三佐港の様子をよくとらえており、また筆法には南画風の技法が見られ、文化・文政期に南画が広く展開したありさまをも示す作品でもある。

岡藩船三佐入港船絵馬

⑧深山流　伊与床神楽

大分市南部の伊与床地区の伊与床五柱神社に伝えられる神楽で、碑文によれば、明治14年（1881）に深山神社（現：豊後大野市朝地町）の祠官石川親永から伝授されたとされる。旧大野郡内に分布する岩戸系神楽のうち深山流の流れをくみ、同流のものとして市内では唯一のものである。由来を示す史料や秘伝書が残されており、忠実に古様を伝えている貴重な神楽である。

伊与床神楽

⑨柞原八幡宮の森（ゆすはらはちまんぐう）

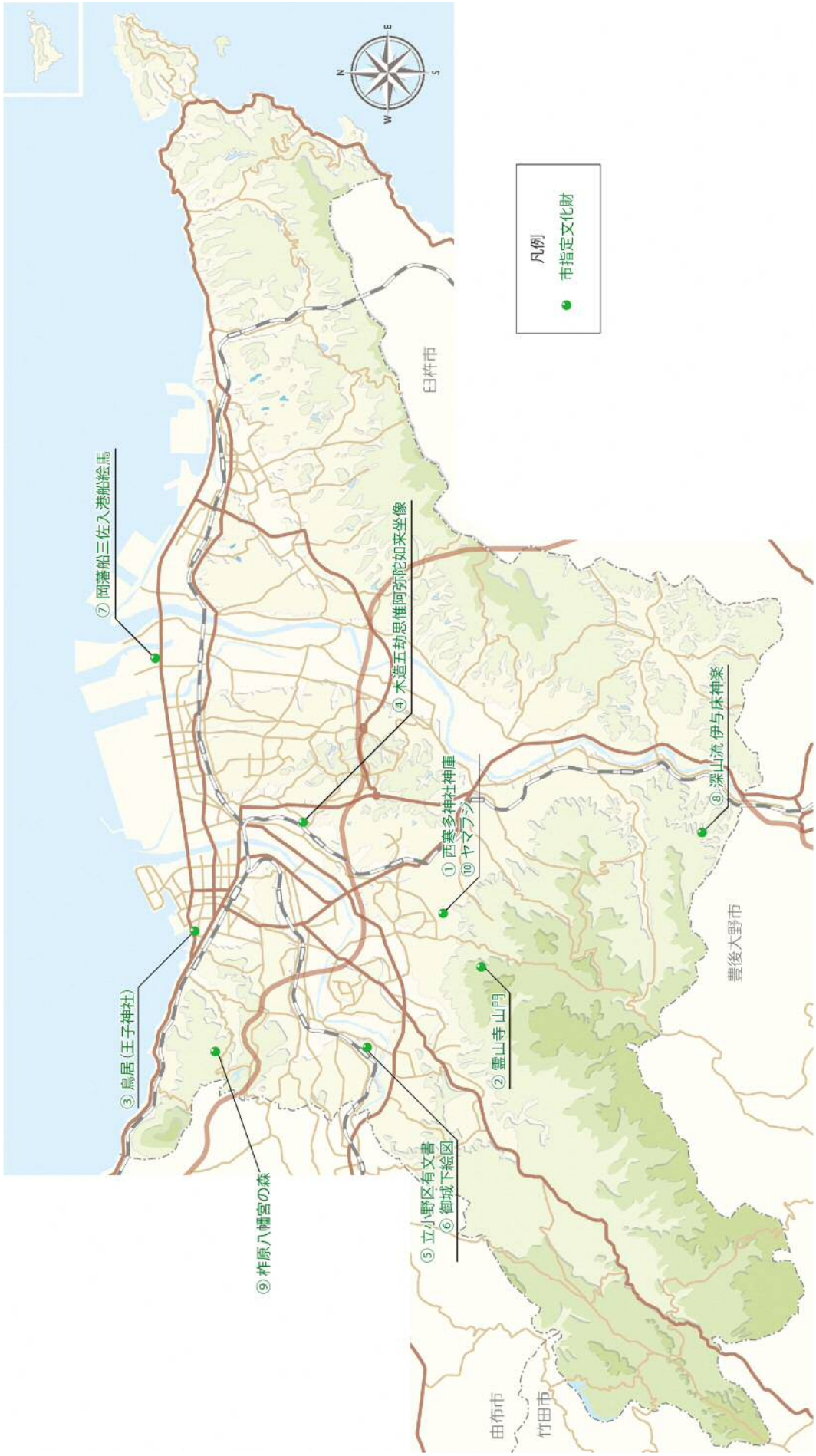
柞原八幡宮境内及び周辺の森約13haである。とくに社殿北側に広がる森林はコジイを優先種とし常緑広葉樹林のスダジイ群団に属する森林で、コジイイチイガシ・イスノキの優占度が高く、巨木も多くみられる。イノシシやタヌキ、アオゲラ、キムラグモなどの生息地域ともなっており、都市近郊の森でありながら自然林の姿を留め、大分市の貴重な残存林である。

柞原八幡宮の森

⑩ヤマフジ

西寒多神社の境内にあって、4月下旬頃紫色の総状花序をつける。その長さは130cmにも達し見事なものである。そのため、花の季節には観光客でにぎわっている。このフジは、大分県内では類を見ないほど大きく、幹周り約180cmにも及ぶ。地上より約2mのところから枝分かれしている。このつるは、人工的に造られた棚にまきつき、東西約24m、南北15mにまで広がっている。

ヤマフジ


凡例
市指定文化財
N
W
E
S
臼杵市
豊後大野市
由布市
竹田市
⑦ 岡藩船三佐入港船絵馬
④ 木造五劫思惟阿弥陀如来坐像
③ 鳥居（王子神社）
⑨ 祚原八幡宮の森
⑤ 立小野区有文書
⑥ 御城下絵図
① 西寒多神社神庫
⑩ ヤマブシ
② 霊山寺 山門
⑧ 深山流 伊与床神楽

市指定の文化財位置図

（５）未指定の文化財

国・県・市指定等の文化財以外に、本市域に存在する歴史的価値の高い文化財を「未指定の文化財」として紹介する。

① NTT大分支店別館（旧逓信省大分電報電話局）

旧逓信省大分電報電話局として逓信省営繕課の設計の建物であり、清水組により昭和2年（1927）に建設された。アーチ状の玄関をもつ装飾のない鉄筋コンクリート二階建で、鉄筋コンクリート建物としては大分市で最初に建設されたものである。本建物は、通信省営繕課技師であった上浪朗の設計になる可能性が指摘されており、昭和初期の建築物として貴重である。

NTT 大分支店別館
（旧逓信省大分電報電話局）

② 九州電力上野変電所

大分水電により大正3年（1914）に建られたレンガ造二階建の変電所で設計者は不明である。平面Ｌ字形の建物両端にはパラペット（屋根のまわりに立ち上げた壁）が立てられ、妻部分にはメダリオン（大きな円形の飾り）が配置されている。イギリス積みの赤レンガ造りで、一部白の装飾をしており、1階窓は要石を用いたアーチ窓にしたりするなど、細部にわたり工夫したデザインがみられる。

九州電力上野変電所

③ 金剛宝戒寺大日堂

木造二層、入母屋造、本瓦葺、唐破風付きの建造物で重要文化財「木造大日如来坐像」が安置されている。外観からは2階建てに見えるが、内部は天井がなく、一室である。『大日本帝國大分県社寺名勝圖録』（明治37年（1904））に明治30年（1897）当時の姿が描かれている。

金剛宝戒寺大日堂

④ 萬壽興聖禅寺

萬壽興聖禅寺は鎌倉時代末期の徳治元年（1306）大友氏5代貞親によって建立され、中世府内町で最大規模を誇る禅宗寺院であったが、16世紀末に焼失し江戸時代初めに竹中重義の援助によって旧地よりも北側に移して現在の位置で再建された。仏殿、観音堂、経蔵、輪蔵は18世紀の建物であり、山門は文政2年（1819）に建築されたものである。

萬壽興聖禅寺山門

⑤金子家住宅（旧呉服店万太・旧戸次郵便局）

元は鶴崎町内にあり、細川家の別宅として建てられた建物だったと伝えられている。母屋は、式台付き玄関と書院付きの客間をもつ武家屋敷風の建物である。大正2年（1913）に戸次に移築され「万太」の屋号をもつ呉服店を営んでいたが、昭和7年（1932）に一部を洋風に改築して郵便局を開業した。現在、旧郵便局部分は「大南地区まちづくりセンター」として活用されている。

金子家住宅（旧呉服店万太・旧戸次郵便局）

⑥万弘寺の市

万弘寺は、585年に用明天皇の祈願所として創建された寺院であると伝えられている。

「万弘寺の市」は本尊である観世音菩薩の縁日にあたる5月18日から7日間行われている。

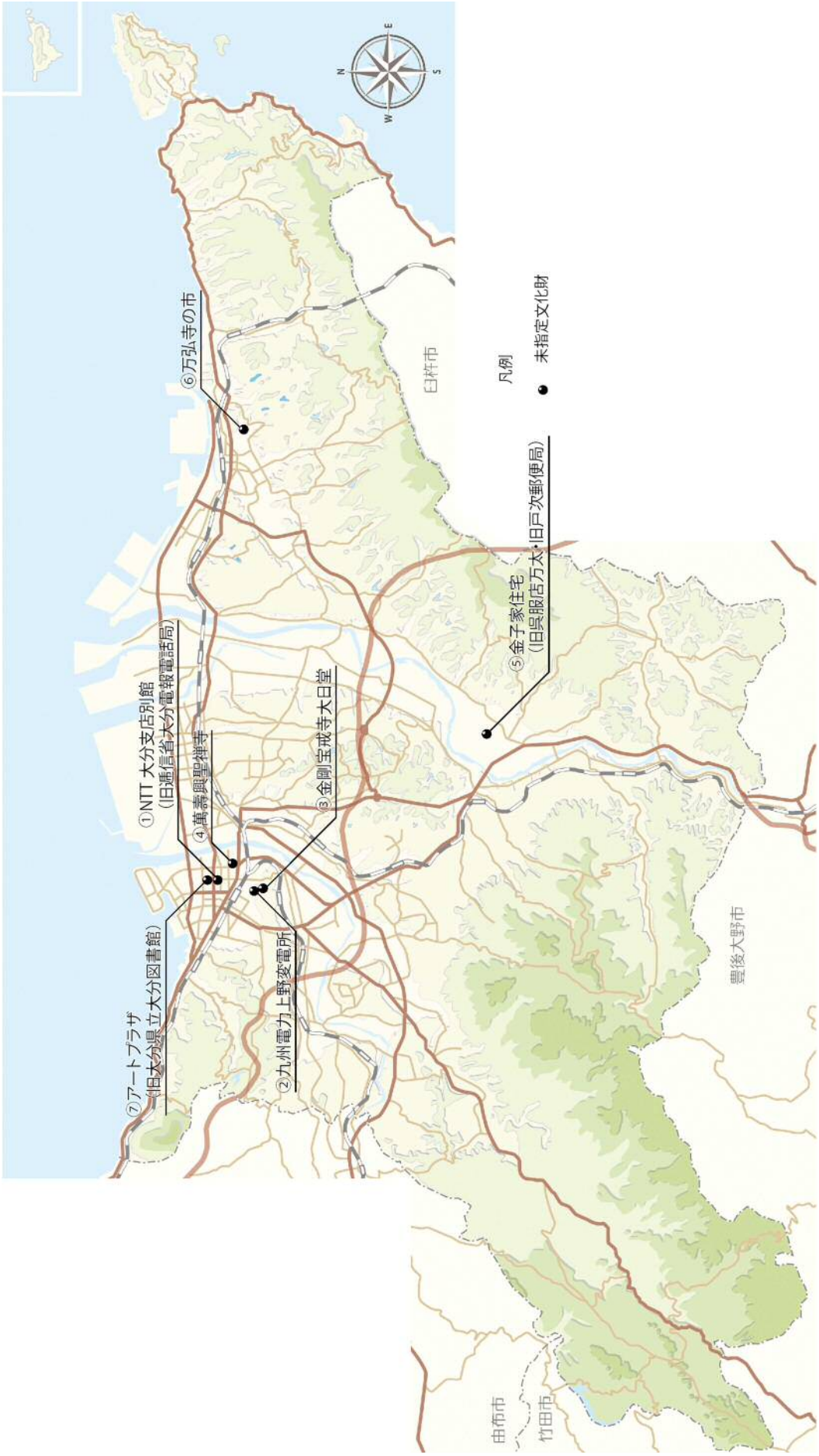
期間中の土曜日未明に行われる物々交換は「かえんかえ」の掛け声をあげながら思い思いの品物をもちより直接交換し、その駆け引きが面白く約1400年の伝統があり、この市における名物でもある。

万弘寺の市

⑦アートプラザ（旧大分県立大分図書館）

地上3階、地下1階の鉄筋コンクリート造で大分市出身の国際的に活躍する建築家　磯崎新氏の設計によるものである。昭和41年（1966）に大分県立大分図書館として開館した。平成10年（1998）に図書館移転後、市民のための文化情報の交流の場「アートプラザ」として活用している。

アートプラザ


⑦アートプラザ
（旧大分県立大分図書館）
①NTT 大分支店別館
（旧逓信省大分電報電話局）
④萬壽興聖禅寺
②九州電力上野変電所
③金剛宝戒寺大日堂
⑥万弘寺の市
⑤金子家住宅
（旧呉服店万太・旧戸次郵便局）
凡例
未指定文化財
臼杵市
豊後大野市
由布市
竹田市
N
W
E
S

未指定の文化財位置図

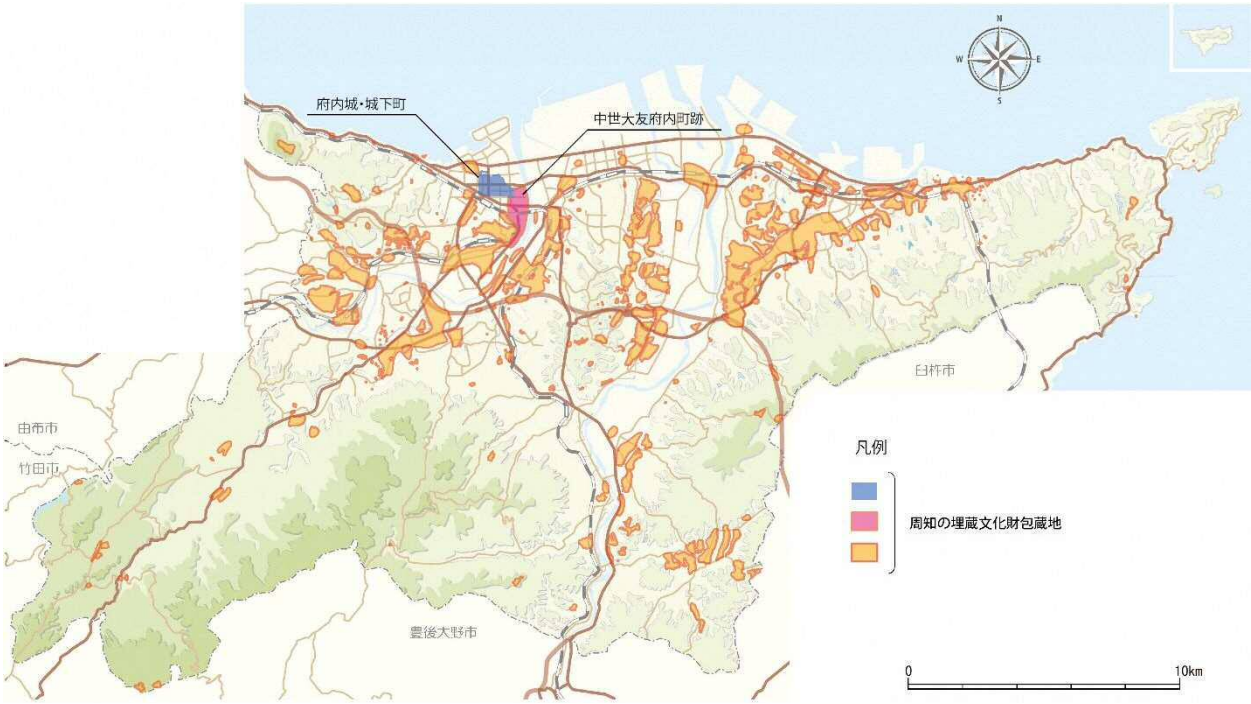
（６）埋蔵文化財

大分市内には、平成31年（2019）4月1日現在422ヶ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が確認されている。大分川下流域は古代から近現代まで平面位置を徐々に北へ移動させながら政治的中心でありつづけた歴史があり、微高地上や周辺台地上には古墳時代以降の遺跡が残されている。特に中世には大友氏のもとで都市的な発展がみられ、中世大友府内町跡の遺跡名で周知されている。最近の20年間、当該地区で進められている都市再開発や主要交通路の整備などに伴って中世大友府内町跡の約10％に及ぶ面積の発掘調査が実施された結果、濃密な遺構が分布する都市的空間の広がりがあったことが解明されている。

このほか大分川東岸の微高地上から大野川（おおのがわ）下流域までの間にある台地上には下郡（しもごおり）遺跡をはじめ大規模な弥生時代遺跡が分布している。

大分川中流域～七瀬川（ななせがわ）流域の微高地上や市東部の丹生（にゅう）川流域には条里地割が発達している。

遺跡の分布している微高地を望む台地や丘陵の斜面や谷部には古墳時代後期の横穴墓が造られていることが多い。



周知の埋蔵文化財包蔵地の分布

（７）大分市の郷土料理

ほうちょう

戸次（へつぎ）地区に伝わる郷土料理。小麦粉をこねて伸ばして1本ずつ作る麺で、1本の麺の長さは2m以上あり、つゆにつけて食べる。名前の由来としては、戦国時代、アワビ（鮑）が不漁だった時に、大友宗麟（おおともそうりん）の家来が小麦粉をこねてアワビの腸に似せたものを作ったところアワビ好きの宗麟が喜んだという説がある。江戸時代の記録には、現市域の他地区にあったみそ仕立ての「ほうちょう」があり、大友宗麟に関連する起原の言い伝えも書かれている。また、「戸次のほうちょう作り」は大分市の民俗文化財に指定されている。

ほうちょう

だんご汁

麺状に細く手延べしただんごに里芋、椎茸、ゴボウなどの山の幸を加え、みそ仕立てにしたもの。

だんご汁

おとし汁

大分市南西部の野津原（のつはる）地区のもてなし料理で山で採れる山芋、庭で飼っている鶏、畑のゴボウを用いた。一口程度の量の山芋を取り、鍋に「落とす」調理法から名付けられた。

おとし汁

とりめし

江戸時代の末期の頃、大分市南部の吉野地区の猟師がキジや鳩の肉で作ったのがはじまりと言われ、現在は鶏とごぼうを用いる。昔は地区での共同農作業の打ち上げなどで皆が集まる時に各家々から持ち寄ったり、お祝い事や、来客があった時などに作られた料理だったとされる。

とりめし

りゅうきゅう

新鮮な魚（ぶりやさばなど）の刺身を醤油やしょうが・ゴマを入れた漬け汁に浸し、しばらくおいてから食べる料理である。

松岡ずし

大分市南東部の松岡地区に伝わる郷土料理で、甘酢を効かせ強く握ったご飯の上に、酢でしめて甘酢をくぐらせたアジの切り身を載せ、全体を青ジソで巻き、おろしショウガとゴマをつける。かつては大野川でとれるボラを使用していた。

りゅうきゅう

松岡ずし